

2006. 5/14 改版=2-7

思考のトポス

現代哲学のアポリアから

◎ 中山 元著

本書を読み解く際の重要な鍵は書名にある「トポス」と「アポリア」である。後者「アポリア」とはギリシャ語で「道が塞がれて通れない」隘路」という意味で、ここでは哲学と道徳の破綻を指し、1930年代に哲学はこの隘路に立ち至ってしまったと第1章で著者はいう。

しかし、哲学者たちは隘路に立ち至ることに、そこを抜け出すためのツールを磨いてきた。そのツールがここでいう「トポス」で、2章から8章までは主にヨーロッパで開発されたトポスが紹介されている。その代表的なものはウイトゲンシュタインの言語分析や、その方法論に依拠したハーバーマスの語用論、さらには身体と精神という対立概念を「脱構築」しようというさまざまな試み、真理を哲学や学問の体系のなかではなく、日常の人々の語る言葉と姿勢のうちに見出そうとするフーコーの「パレーシア」という概念などで、これらが百科事典的に網羅されている。(B6判・288頁・2500円・新曜社)